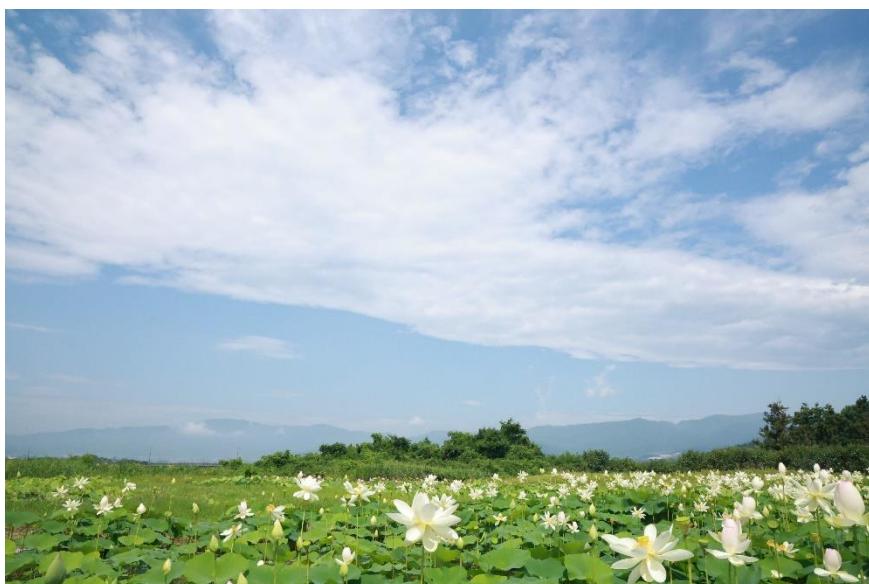


令和七年度 伊達市民憲章

作文コンクール受賞作品集



福島県伊達市

作品集発行にあたつて

伊達市長 須田 博行

伊達市民憲章作文コンクールは、次代を担う市内の小・中学生の皆さんのが、作文を通じて市民憲章の意味を捉え、自分の将来や伊達市の未来についてよく考える機会となるとともに、この作文を書くことで、ふるさとへの愛着心を育み、心豊かに成長してほしいという願いを込めて、平成二十九年度から実施しております。

伊達市民憲章は、伊達市合併十周年を機に、まちの一体感をつくりあげ、目標を共有し、市民の皆様とともに力を合わせてより良いまちづくりを進めていくための行動規範として作られたものです。

今回は、市民憲章の一つである「きずきましよう 学ぶ心とゆたかな文化を」をテーマとして作品を募集したところ、小学生部門と中学生部門あわせて四百七十八点の応募がありました。身近な体験や地域の行事に参加をして学んだことや、地域の文化を継承していくことの大切さなど、まっすぐな視点で書き上げられた素晴らしい作品ばかりでした。

伊達市民憲章には、市民一人ひとりが自分のまちをより良くするために、「自分にできること」を具体的に自覚し、できる範囲で実行しようという思いが託されています。応募作品を読み、小・中学生の皆さんのが、市民憲章の根本的な意義について理解し、「伊達市の未来をより良くするために自分たちが何をするべきか」と、真剣に思いを巡らせている姿勢に感動いたしました。

本作品集が多くの方々の目に触れることで、市民憲章を身近に感じ、ふるさと伊達市への愛着がより一層高まることを切に願っております。

結びに、本コンクールの実施にあたり、児童生徒の皆さんをご指導いただきました先生方、多くの作品を真剣に審査いただきました審査委員の皆様、そして、ご協力いただきました関係者の方々に感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

目 次

作品集発行にあたつて

伊達市長

須田 博行

小学生の部

【最優秀賞】

地域のごみ拾い

伊達東小学校
六年 大橋 亜蘭

【優秀賞】

みんなの支え

上保原小学校
五年 池田 幸永

月館学園小学校
六年 大河内咲希

【優良賞】

私の居場所

伊達小学校
六年 小山 真桜

保原小学校
六年 長沼 斗夢

掛田小学校
六年 引地 駿輔

祖父母と私の学び

学ぶことは人生を楽しく生きること

学ぶ心と引きつがれる伝統

12 11 10

9 8

7

5 1

お祭りを通して考えたこと

【佳作】

人々を支えてきたお蚕様

伊達市の笑顔を引き継ぐこと

僕が文化を繋ぐには

伊達市をよりよくするためにできること

小国 小学校 五年 八島 優空

伊達 小学校 五年 石高 結梨

梁川 小学校 六年 鈴木 美千翔

掛田 小学校 五年 丸山 鳩志朗

小国 小学校 六年 星野 大河

月館 学園中学校 二年 大河内 瑞希

中学生の部

【最優秀賞】

音楽を通して感じたこと

桃陵中学校 二年 田中 千春

21

靈山中学校 二年 菅野 隼平

19

靈山町のこれからのために
教える側へ

月館学園中学校 二年 大河内 瑞希

23 22

17 16 15 14

13

【優良賞】

笑顔が絶えない町の伊達市

学びと、発信

天まで届け俺らの太鼓

いつまでも美しく、笑顔溢れる町へ

【佳作】

その先に見えるもの

私の好きな町、伊達市

靈山太鼓を広めるために

地域の伝統を守るために

伊達中学校	一年	渡邊 裕乃
梁川中学校	三年	橘 沙紀
松陽中学校	一年	渡邊 友惺
桃陵中学校	三年	佐久間心凜
伊達中学校	三年	芳賀 彩風
梁川中学校	一年	幕田璃央那
靈山中学校	一年	高田 愛依
靈山中学校	三年	菅野 愛

伊達市民憲章

講評

小学生の部



最優秀賞

地域のゴミ拾い

伊達東小学校 六年 大橋 亜蘭

ぼくは、お手伝いや散歩をしているときに、バス停やごみ捨て場に落ちているごみが気になっていました。ある日、思い切ってごみを拾つてみると、地域の人には「ありがとう。」と言つてもらえて、とてもうれしくなりました。そのときから、ぼくは地域をきれいにすることをもっと続けたいと思うようになりました。

家の近くにはバス停があります。そこを通るたびに、空き缶や袋などが落ちているのをよく見かけました。

「どうしてこんなにごみが多いのだろう。」

と思いながら観察してみると、バスを待つてゐる人がポイ捨てをしていたり、バスから降りた人がそのまま置いていつたりする場面を見かけました。ぼくは、なんとかしなければと思い、家族に相談しました。家族と話し合つた結果、散歩するときに一緒にごみを拾うことにしました。

最初はぼくと家族だけでごみを拾つていました。けれど、その様子を見ていた地域の人も自分もやってみようと思つてくれたのか、少しずつ協力してくれるようになりました。そして不思議なことに、ごみを捨てていく人もだんだん少なくなってきた。ぼくがごみを拾つているときに、地域に住んでいるおばあさんが声をかけてくれました。

「いつもありがとうございます。」

その言葉を聞いたとき、心が温かくなり、とてもうれしくなりました。散歩が前よりも楽しくなり、続けて良かったと思いました。

また、お手伝いでごみを捨てに行くときにも、ごみ捨て場の周りにごみが落ちているのをよく見かけました。ある日、地域に住むおじいさんに出会いました。そのおじいさんは、ほうきと袋を持っていて、ごみ捨て場の周りを掃除していました。気になつて理由を聞くと、おじいさんはこう教えてくれました。

「ごみを捨てに来た人が扉をきちんと閉めないと、動物が中に入つて荒らしていました。」

ぼくは、地域をきれいにするために、掃除をしてくれている人がいることを知り、とても心強く感じました。

ごみを拾つたり、地域の人から話を聞いたりして、ぼくは大切なことに気付きました。それは、自分が少し行動するだけで、地域の人が喜んでくれたり、一緒に協力してくれたりすることです。そして、ごみをなくすためには、自分一人ではなく、みんなが気を付けることが大切だと分かりました。

これからも散歩のときには、ごみ拾いを続けたいです。そして、地域をきれいにすることで、もっとたくさん的人に喜んでもらえるようにしたいです。小さな行動でも、続けていけば大きな変化。そして、それがすてきな文化になつていくと信じています。ぼくはこれからもごみを拾い続けて、気持ちの良い地域づくりの文化をつくつていきたいです。

優秀賞

みんなの支え

上保原小学校 五年 池田 幸永

ぼくの家族は、お父さん、お母さん、中学二年生のお姉ちゃんとぼくの、四人家族です。ぼくは、今年から、上保原バスケットボール少年団に入りました。ぼくは、まだ初心者ですが、自分なりに上手になれるように努力して練習をがん張っています。

ぼくのお姉ちゃんは、吹そう楽部に入っています。お姉ちゃんは中学校から、楽器の演そうを始めたので、学校の部活以外でも家に楽器を持って帰つて楽器の練習をしています。お姉ちゃんも一生けん命に楽器の練習をして上手になろうとしています。

今年の六月に保原体育館で、伊達市吹そう樂きらめき事業合同演そう会が行われました。その演そう会では、ぼくのお姉ちゃんも楽器を演そうしました。大人数での演そうは、迫力があり、聴いていて鳥肌が立ちました。そして、最後には演そうを聴いていた観客の人たちと一緒に「ふるさと」を歌いました。一つの歌をみんなで歌つたことで、会場のみんなが一つになつた感じがしました。

演そう会の後に、お母さんとお姉ちゃんが合同演そう会のことについて話してくれました。音楽の力で東日本大震災の復興を支えていこうと始まつたこと。お姉ちゃんと一緒に演そうした東京芸術大学は、音楽のト

ツレベルの先生や学生が集まつた大学であること。その大学と伊達市の中小学生とが合同で演そう会を開き、音楽を通して復興を進めていくことをしていること。

ぼくは、東日本大震災のときはまだ生まれていなかつたので、くわしくは知りませんでした。お父さんから、そのときの様子を聞きました。地震で大きなゆれが続いたことや福島第一原子力発電所が津波の影きようでばく発し、大量の放射線が大気中に放出されたことです。その放射線が風に乗つて伊達市までやつてきて、多くの人が他の地域にひなんし、家族がばらばらになつた人もいたそうです。現在は、除染作業のおかげで放射線が低くなり、ぼくたちは伊達市で安心して暮らすことができます。

吹そう樂きらめき事業合同演そう会は、東京から復興を手助けしてくれる人たちによつて始まつたものです。人の温かさにはすごい力があるのだと思いました。ぼくたちは、そのような人たちに支えられて生きているのだと改めて感じました。

東日本大震災で被災しましたが、みんなの力で復興に向けてがん張つている伊達市に、ぼくたちが暮らせていることにとても幸せを感じます。今、ぼくはバスケットボールを一生けん命にがん張っています。まだまだ上手にできません。けれどもバスケットボールができることに感謝し、練習を重ねたいと思います。また音楽も大好きなので、ぜひ楽器にも挑戦しきらめき合同演そう会に出て感動させられるような演奏をしてみたいですね。

優秀賞

私の居場所

月館学園小学校 六年 大河内 咲希

「お母さんの子どもの時は、学校終わってから友達の家に行つて一緒に遊んだり、地域の商店にお菓子を買いに行つたりしたのよ。」

と、母から聞いた時、私は、「いいなあ」と、うらやましく思つていました。

私の家から歩いて行ける友達の家はありません。親の都合が合わないと友達の家に行つたり、自分の家に来てもらつたりすることができないので、私は学校以外で友達と会つて遊ぶことがありませんでした。でも、つきだて食堂を知つて、友達と遊ぶきっかけができました。

つきだて食堂は、月館中央交流館で月一回最終土曜日に開催されます。こども百円、大人三百円で温かい食事を提供してくれます。これを利用して、つきだて食堂の日に午前九時半に友達と交流館に集まって、遊んで食事をして、午後三時に解散するということを、毎月やっています。安く食事ができるので、余ったお金でお菓子を買えるし、交流館は、エアコンがあるので、快適に過ごせるし、雨が降つたら体育館で遊ぶことも可能だし、管理人さんがいるので、何かあつても安心です。私にとつて、交流館は、一日中ずっとといられる場所で、友達と遊ぶのに必要な場所です。

六年生になつて、私は友達と一緒につきだて食堂をボランティアで手

伝いました。つきだて食堂の食事は、ボランティアの人たちが作つていて、食材の一部は地元の人たちから提供されたものを使つています。栄養士さんが、栄養のバランスを考えたメニューにしたり、ボランティアさんが知つてているメニューをアレンジしたり、てきぱきと楽しそうに作つていました。私は、材料を切つたり、盛り付けたりすることを、手伝いました。いつもは、食べるだけでしたが、実際に作つてみると、時間までに必要な個数を作らなければいけないし、食事会場の準備も必要だし、思つていたより大変でした。つきだて食堂では、交流館で食べる分とテイクアウト分を作つてあります。食べにくるお客さんからは、

「今月も楽しみに来たよ。」

「あら、久しぶり、元気だつた？」

など、いろいろな声が聞こえきます。一人で来た人や親子で来た人、私達と同じように、友達と待ち合わせて来た人などいろんな人が利用しています。つきだて食堂は、交流の場となつてるので、必要な取り組みだと思います。それでも、つきだて食堂を運営している人は、

「もっと幅広い年代の人達に利用してもらえないかな。」

と言つていました。たしかに、小学生は、少ししか利用していません。友達の中には、つきだて食堂を知らない子もいます。私は、みんなに知つてほしいと思いました。だから私は、学校で地域の行事を紹介して、その良い取り組みを今後も残していきたいです。

優良賞

祖父母と私の学び

伊達小学校 六年 小山 真桜

私の両親は仕事をしています。それで私は、赤ちゃんのころから今まで、日中は祖父母の家で過ごすことが多くあります。あまりに小さくて覚えていませんが、祖父母に折り紙やお手玉を教えてもらい、よく遊んでいたそうです。おかげで、手先が器用になりました。それから、こども園に入るまでは、子育てしんセンターの「わんこ」や「にゃんこ」に連れて行つてもらい、色々な体験をして育つてきました。また、屋内遊び場の「スマイルパーク保原」や「パレオパーク梁川」、「ちびっこ広場」にも日替わりで連れて行つてもらい、のびのび遊んでいたそうです。祖父母には大切に育ててもらつたなあと感じます。

今では祖母に、エコクラフトという手芸を教えてもらつています。どう

すれば上手く作れるか一緒に考えたり、完成したときに一緒に喜んだりするのですが、とても楽しいです。友達にエコクラフトで作った作品をプレゼントすると、友達はとても喜んでくれました。また、祖父とは一緒に間違い探しをします。難しい問題にチャレンジして、全部分かった時はとても楽しく、達成感を感じます。世代をこえて楽しめるものはたくさんあります。同じ年の友達と遊ぶのも楽しいですが、祖父母などと世代をこえて遊ぶことも、出来ることが広がって、学ぶことがたくさんあると思います。

私は祖父母に伊達市の色々なところに連れて行つてもらつたり、遊んだりしながらたくさんのこと学んできました。私が祖父母から学んだことを、今度は私が、次の世代につなげていきたいと思います。また、祖父母のように、私も年を重ねても好きなことを続け、新しいことにチャレンジし、学んでいくことを大切にしていきたいと思います。

私の祖父母は今、元気づくり会や健幸クラブ Fine に通っています。また、祖父は野球が好きで、若いころからソフトボールチームに所属し、今でも体を動かしています。毎週練習に行つたり、遠くまで試合に行つたりすることもあり、チームメイトと一緒に楽しんでいるようです。いくつになつても好きなことを続けることは出来るのは、いいなあと思います。一方、祖母は運動が苦手で、今まであまり運動をしてこなかつたそうです。そんな祖母ですが、元気づくり会や健幸クラブ Fine に通うことで、今では運動をするのが楽しそうです。年を重ねてからでも、新しいことにチャレンジする事がたがすごいなと思います。さらに、運動に行つてきた日は、「今日○○さんに会つて、○○だつた。」など楽しそうに話してくれます。運動の場ですが、運動するだけじゃなく、人とつながることが出来る場なんだなあとと思いました。祖父母の様子を見て、好きなことを続けること、新しいことにチャレンジすることはいいことだなと思います。そして、お世話になつてている祖父母には、元気に長生きしてほしいと願つています。

優良賞

学ぶことは人生を楽しく生きること

保原小学校 六年 長沼 斗夢

伊達市民憲章本文の学ぶ心というのを見て最初に思いうかんだのは、ぼくのおじいちゃんのことです。おじいちゃんは仕事を退職してから独学で学んだり、近くの工房から話を聞いたりして木工を始めました。最初はしゅ味で家の家具などを作っていましたが、今では木象がんという技法を使つた花びんや、子どものおもちゃなどを作つて販売しています。近くのいろいろなイベントに出店もしています。

おじいちゃんが出店しているイベントの中で、ぼくが一番好きなのは

伊達市月館町で開さいされている、モノ作りびとフェアです。伊達市や福島市だけではなく、全国各地から物づくりをしている人が集まって来ますぐくにぎわうので、ぼくも毎年楽しみにしています。楽しみにしている他の理由は、たくさん的人が伊達市に来るので地域の活性化につながっていると思うし、それにぼくのおじいちゃんも貢献していると思うとうれしくなるからです。そんなおじいちゃんを見ていると、何歳からでも自分の好きなことを学び、それを活かして元気に活動しているところが、とてもかつこよく見えます。

ぼくが住む保原町や周りの町にもそういうイベントができて、楽しく学ぶ人たちと交流できる場所が増えたらいいなと思います。物づくりを

している人と交流をもつことで自分もやつてみたいなと思う人もいると思うし、そうやって興味や関心をもつことが学ぶ意欲につながるのではないかと思います。大人も子どもも関係なく、好きなことや興味のあることに積極的にチャレンジしたくなるようなきづかけづくりと、その成果

を地域の人たちに見てもらえる場所をつくることで、いろいろな特技をめぐらに教えたり、受け継いだりもできるのでそこから新しい文化や伝統がうまれるかもしれません。そう考えると、伊達市の未来がどんなふうになっていくのかワクワクします。ぼくもおじいちゃんのように学ぶって楽しいなと思えるようなことを見つけて、それを活かして地域に貢献できるようになれたらうれしいです。

「きずきましよう 学ぶ心とゆたかな文化を」この伊達市民憲章に込められた思いが市民みんなに伝わり、自分らしく楽しく生きる人が一人でも増えたら、今よりもっと活気のある豊かな町になるのではないかと思います。

優良賞

学ぶ心と引きつがれる伝統

掛田小学校 六年 引地 駿輔

「学ぶ心」この言葉を聞いて、ぼくはまつ先にひいおばあちゃんを思いうかべました。

ひいおばあちゃんは九十八才になつた今でも、毎日欠かさず新聞を読んでいます。そして、読んだことをよくぼくに教えてくれたり、感じたことを話してくれたりします。また、新聞に書いてあることを、ノートに書き写したりしています。先日は、ハラスマントについての言葉の意味を書き写していて、ノートにはパワハラやモラハラ、セクハラ、カスハラ等の言葉について書いてありました。高れいのひいおばあちゃんからすると、とても難しい言葉だそうです。それでも、いまどきの言葉を覚えようと努力しているひいおばあちゃんは、すごいと思いました。ひいおばあちゃんは、

「最近よくニュースで聞く言葉だけど、意味が分からなかつたから書いておこうと思って。」

を卒業しても必要なものなんだ、と改めて思いました。ぼくも、ひいおばあちゃんを見習つて、いくつになつても学ぶ心を忘れないようにしたいです。「学ぶ心」をもつているひいおばあちゃんは、もうすぐ百才になるけれど、いつも生き生き暮らしています。

「ぼくたちは、それぞれに夢をもつてゐるから、これら全てを引きつぐことは難しいかもしれません。けれども、自分が興味をもつたことを次世代にも伝えていき、地域の方たちの思いをつなげていきたいです。

お母さんが時々、

「亡くなつたおばあちゃんに、もつといろいろ聞いておけばよかつた。」と言うので、ぼくは後かいのないよう、これからもいろいろな人たちから教えていただき、たくさんのこと学んでいきたいです。

地域のおじいちゃんやおばあたちから学んでいることも、たくさんあります。

例えば、掛田小学校には、地域の伝統や自分が取り組んできることを教えに来てくださる方がたくさんいます。ししまいや靈山太鼓などについても学びましたが、ぼくが一番興味をもつたのは、蚕についてのことです。

三年生で蚕についての学習が始まった時には、ぼくは蚕について全く分からなかつたけれど、地域の八島さんに教えていただき、養蚕の歴史や特ちようなどを知つていくうちに最初は苦手だった蚕が好きになりました。

教えに来てくださる方たちは、自分が取り組んできたことや地域に伝わる伝統について、ぼくたちに興味をもつてもらい、その思いを引きついでほしい、と期待しながら、一生けん命教えてくださつていただなん、と思いました。教えていただいた中には、とても興味深いこともたくさんあるので、地域の方たちに教えていただけるのはありがたいことだな、と思いました。

優良賞

お祭りを通して考えたこと

小国小学校 五年 八島 優空

わたしは、伊達市のお祭りが大好きです。わたしの父と弟は、靈山太この保存会に入つて太こをやつています。父は、太こを始めて三十年以上になるそうです。父の太こを見るために、わたしは自然とお祭りに参加する機会が増えました。以前、太このたたき方を父に習つたことがあります。盆おどりの時にたたく「じんく」という曲です。わたしにはとても難しいたたき方でしたが、いつか父と一緒にたたいてみたいです。

夕方からは子どもたちの太こがひろうされました。弟もかつこよくたたけていました。太この体験もやつていて、小さな子が、チャレンジしていました。太こに興味をもつてもらえたらしいなと思いました。その後、七時から盆おどりがありました。母から盆おどりは、お盆にもどつてきた亡くなつた方々の靈をしずめるものだと聞きました。わたしは、そういう願いがこめられたものだと考えながらおどることにしました。結果、今年は小国区民会の会長さんから「会長賞」を頂くことができました。とてもうれしかつたです。来年は、もつとうまくおどりたいです。準備本番、片付けと地元の人たちの手作りのお祭りだということに気付き、これからもこの祭りを残していきたいと思いました。

わたしの好きなこの二つの祭りを通して分かったことがあります。どのお祭りもみんなで協力しているということです。少子高齢化で伝統を引き継いでいくことが難しくなつていると聞いたことがあります。伊達市も高齢化は進んでいるそうですが、地元の祭りを通して様々な世代の人々が交流できることは大切だと思います。わたしは、これからもお祭りに参加して、伊達市のゆたかな文化を残していくらと思いました。お祭りにはそれぞれの良さがあるのでいろいろな地域や地区のお祭りに参加し、それを感じて、自分の地域をより良くしていきたいです。

わたしはもう一つ好きな祭りがあります。それは、地域で行われている夏祭りです。小国の夏祭りは、毎年、靈山道の駅で行われます。今年は、八月九日に開さいされました。最初に二組の保存会の太こがひろうされました。キッチンカーや地区の人のお店など地元ならではのお祭りです。

人々を支えてきたお蚕様

伊達小学校 五年 石高 結梨

私が初めてお蚕様を知ったのは、五年生の通学合宿の時です。お蚕様と聞いて、なぜ蚕に「様」をつけているのかな、それとも伊達のえらい人なのかなと不思議に思いました。通学合宿でお蚕様について教えてもらい、お蚕様はカイコガというがの幼虫で、お蚕様がはく糸は貴重品なので、「様」をつけるということ、さらに、私が住む伊達市では、昔からお蚕様を育てる養蚕業が盛んだつたということを知りました。

特に印象に残ったのは、お蚕様のサナギやフンも人の役に立っているということです。サナギは栄養価が高く、人が食べることができるそうです。フンは、畑の肥料にしたり葉にしたりしたそうです。お蚕様のサナギはどんな味や食感がするのか、フンはどんな病気に効くのか、ますます気になりました。

最後には実際に、ざくくり機という機械を使い、まゆから生糸を作る体験をしました。機械は面白い仕組みで動いていて、回すと手で糸を取った時はちがい、あつという間に生糸ができました。昔の人の知恵でこんなにも速く生糸を作る機械を開発したことに、とても驚きました。

この教室で私は、お蚕様が伊達の人々の生活を支えてくれたことを学びました。お蚕様は伊達市に長い間受けつがれてきています。お蚕様の歴史にほこりをもち、またたくさんの人々が、お蚕様について興味を持つてくれるとうれしいと思います。

講師の方に、お蚕様の歴史について教えていただき、心に残ったことがいくつもあります。

まずは、桑の葉しか食べないということです。私は、身近にある様々な葉を食べると思っていましたが、お蚕様の口には、桑の葉しか合わないと

知り驚きました。お蚕様がはく糸からまゆができる、そのまゆから糸が取れることも初めて知りました。私は、その糸でストラップ作りをしました。まゆから糸を取って枝にまきつけましたが、まいてもまいても糸が続き、なかなか終わりませんでした。一つのまゆから取れる糸の長さはなんと、千二百メートル以上もあると知り、目が丸くなりました。

伊達市の笑顔を引き継ぐ」と

梁川小学校 六年 鈴木 美千翔

「今月もありがとうございました。お姉ちゃんもお手伝いをいつもありがとうございます。」

毎月、地域の方々からありがとうございます。私の家は、今年度から町内会の班長となり、おたより配りや地域行事の段取り、班全体での話し合いへの参加など、地域の方たちとの関わりが多くあります。その中でも月一回の広報誌配りは、私も母と一緒に行き、直接地域の方々と

お話をする良い機会となっています。私の住む町内では、サロンがあり、

お茶会や七夕まつり、いも煮会、ひなまつりなど、近所の方たちで集まり楽しい時間を過ごす活動があります。私も活動に参加したことがあります。一人暮らしの方や体が不自由な方、高齢の方など、みんなが楽しく時間を過ごせるように工夫がされていて、町内の方たちの思いやりがあふれている活動だと感じました。そして、一人のおじいさんが私に話してくれました。

「子どもたちの笑い声は、うちらの元気のエネルギーなんだよ。」

この言葉が印象的で、とてもうれしい気持ちになりました。足やこしが痛くならないようないすを用意したり、体を心配し気づかう声かけをしたり、子どもからお年寄りまで、みんなが笑顔になる地域の行事に直接参加したことで感じた、(この町に住んでいてよかつたな) という安心感を

忘れずにいたいと思いました。

地域の方たちの思いやりや笑顔が、これからも続していくために、私は

どんなことができるか考えてみました。

私ができることは「つないでいく」ことだと思います。大雪の朝、登校班の集合場所で母が、一人の女性の方にお礼を伝えています。その方は、子どもたちが安全に集合し出発できるように、大雪が積もる朝に雪かきをしてくださっていたのです。その方は、

「家の子どもたちも小学校へ通っていた時、地域の方たちが、安全に登校できるようになって見守ってくれていたんです。だから私もできることをしたくてね。」

と言っていました。だれかを思つてしたことが、このような形で、今私たちにひきつがれているのだろうと実感しました。地域の方たちの思いやりを受けとり、私も今できることをバトンのようにつないでいきたいと思います。

まずは、元気なさいさつや感謝の気持ちをきちんと伝えることを心がけ、元気のエネルギーを伊達市に届けたいと思います。

そして、地域の方々とのふれあいの中で、地域行事や伝統文化にふれて学び、そこでの経験を引き継ぎ、しっかりとつないでいこうと思います。伊達市にあふれたみんなの笑顔が、ずっと続くといいなと思います。

「幸せがじゅずつなぎになるまち伊達」

みんなの幸せと伊達市のゆたかな文化がじゅずつなぎに広がるまちにしたいと思います。

僕が文化を繋ぐには

掛田小学校 五年 丸山 風志朗

僕が住んでいる靈山町には、約三百五十年も前から続く靈山太鼓があります。二年生の夏休みに家の近くの山野川ふれあいセンターで、太鼓祭りに向けての練習があると聞き、外の暑さより僕の心が熱くなつてきました。

初練習の日、僕はお父さんを急かして、ふれあいセンターへ向かいました。ここでおどろいた事がありました。それは、太鼓を叩くのは、子どもだけではないところです。大人の人も一緒に叩いたため、「大人も子どもも楽しめる伝統太鼓なんだな。」と感動しました。この時、「少し靈山太鼓の歴史を知りたい。」と思つていたので、この夏休みの機会に、くわしく調べてみることにしました。

まずは、靈山中央交流館に資料を探しに行きました。しかし、資料は見つからなかつたため交流館の人相談すると、

「毎週交流館で子ども達に、太鼓を教えている大友やすこさんに聞いてみるとよいのでは。」と電話番号を教えてくれました。

そして翌日、僕は大友さんに電話をしました。最初に靈山太鼓の歴史について聞いてみると、約三百五十年前から信達地方で独自の発展をしてきた伝承太鼓であると教えてくれました。伝承太鼓は樂ふを使わずに耳

で聴いた音やリズムを伝えていく太鼓です。樂ふがないからこそ地いきごとに太鼓の叩き方に違いが出てくるそうです。さらに、大友さんが太鼓を始めたきっかけを聞きました。大友さんが子どものころは太鼓を叩くのは男性のみで、大友さんはひそかに「やってみたい。」と思つていたそうです。そのため、太鼓の先ぱいに頼みこみ、女性で二番目の靈山太鼓の叩き手になつたそうです。また、忙しい中、毎週子ども達に教えてくれる理由を聞いてみました。昔は太鼓を教えられる人が少なかつたそうです。しかし、東北新幹線開業をきっかけに靈山太鼓に変化が訪れました。町ごとに靈山太鼓をひろうする時には、靈山町一丸となつてひろうしたそうです。その後、毎年夏に太鼓祭りを行うようになり、大人だけでは暑さが辛く「子ども達にも教えよう。」となつたそうです。最後に、一番大変だった事をお聞きしました。昔は演奏中に笑つたり声を出したりする事もいけないルールがあり疑問をもつたそうです。その後、何度も話し合いを重ねた結果、太鼓を叩きながら笑つたり自由にかけ声をあげたりしても良くなつたそうです。

大友さんにお話を聞きして、大友さんの努力があり、老若男女誰でも太鼓を叩けるようになつたと知り、現在の自由で楽しい叩き方は当たり前ではない事におどろきました。大友さんが勇気をもつて教えてくれた事が今の僕達に繋がつていると思い感謝の気持ちとこの文化を今後にも繋げようと思いました。

伊達市をよりよくするためにできること

小国小学校 六年 星野 大河

ぼくは、伊達市をよりよくするために必要なことは、「地域を活性化できる創造的な人材の育成」だと思いました。そこで、創造的な人材を育成するのに大切だと思うことを、いくつか考えました。

一つ目は、「読書」です。自主的に学ぶための学びの土台として、豊かな語いが必要です。語いを豊かにするために、読書は必要不可欠です。そのため、小さいころから本に親しむことができる環境作りが大事だと思います。

ぼくが小さいころから、母が絵本を読んでくれたり、保育園の先生が読み聞かせをしてくれたりしたおかげで、ぼくは、読書が好きになつていま

した。また、ぼくの小学校では、三週間に一回、朝、学校司書の先生が、

読み聞かせをしてくださいます。また、「お話お母さん」というボランティアの方の読み聞かせが、年に数回あります。司書の先生やお話お母さんが選んでくださる本は、様々なジャンルのもので、初めて読むものが多くいつも楽しみにしています。読み聞かせで出会った本からぼくの読書は広がりを見せ、今まで手にとらなかつたジャンルの本も興味がわき、読む

ようになりました。

二つ目は、「伝統や文化を大事にする」ことです。地域のことを知らな

い人間が地域を活性化することはできません。

ぼくたちが住んでいる伊達市霊山地区には「霊山太鼓」という有名な太鼓があります。この太鼓は、約三百五十年の歴史があり、今でも地域に六十組ほどの太鼓が保存され、各地域で守られているそうです。

ぼくは、太鼓があることを知つていましたが、実際にやつたことは、ありません。ぼくたちの学校は、地域を学ぶことの一環で、令和六年度からこの霊山太鼓にチャレンジすることになりました。友だちのお父さんたちが、所属する地元の太鼓保存会の皆さんに教えて頂くことになりました。夏祭りの時に何となく聞いていた太鼓でしたが、実際にやつてみると色々なことが分かりました。ぼくたちが学習している音楽では、楽譜があるので誰でも演奏できます。しかし霊山太鼓には楽譜がありません。「タンタコタンコ」という口伝えによる伝承でした。これが何百年も続いていたと思うと、これからも大切に引き継いでいきたいと思いました。

学校で学習した霊山太鼓は、伊達市の伝統文化の入り口です。太鼓だけでなく、様々な地域の伝統文化を引き継いでいきたいです。

伊達市をよりよくするために、読書ができる環境を作ることと伝統を守ることを挙げました。小学生のぼくにできることは、限られているかもしれませんのが、地域の行事に積極的に参加したり、図書館を有効に活用したりして地域のために様々な視点をもつことができる力を伸ばしていくたいです。

中学生の部



最優秀賞

音楽を通して感じたこと

桃陵中学校 二年 田中 千春

私は桃陵中学校の吹奏楽部に所属しています。現在、吹奏楽部の部員は二十人弱しかいません。しかし、吹奏楽コンクールをはじめ、校内行事における演奏や、文化祭での発表など、演奏を行う機会はたくさんあります。日々一生懸命練習に取り組んでいます。その中の活動の一つに、毎年五月に行われる「伊達市吹奏楽きらめき事業」があります。これは、伊達市の吹奏楽部に所属している小中学生と東京藝術大学の方との合同演奏会で、今年で第十回目を迎えました。音楽を通しての復興支援を目的としており、伊達市民が震災に負けず、音楽を通して笑顔になつてほしいという思いが込められています。

私がこの演奏会に参加するのは二回目です。少人数で活動している私達にとって、大人数で演奏できるこの演奏会はビッグイベントの一つです。演奏会当日はもちろん、それまでの練習会にも力を入れて取り組みました。

この事業を通して、私は改めて演奏する楽しさに気づきました。普段は部員が少ないので、パートの人数は一人から多くても二人ですが、この演奏会は全体で約二百人という大人数での演奏です。今まででは心細くて堂々と演奏できない自分がいましたが、分からないことや不安なことを多くの人に聞き、当日は自信をもつて演奏することができました。何より

また、この演奏会で私は音楽の力を大きく感じました。演奏会が終わつた後、聴きに来てくれた友達は、「人が多く、音が大きくて素晴らしいでした。」と言つてくれました。大勢の観客の盛大な拍手もありました。指揮者の先生が「皆で演奏できてよかったです。」と言つてくださつたとおり、演奏した皆が、会場にいた方々が一つになつたような気がしました。音を奏でて人々に届ける。毎日当たり前のようにしていることが、こんなに多くの人々を笑顔にし、元気づけられるのだと知りました。

伊達市を元気づけたい、その想いで一生懸命取り組んできた演奏会でしたが、この演奏会で自分自身も元気づけられたと感じています。楽器を吹く楽しさはもちろん、人の優しさや人と関わる楽しさも知りました。練習会のはじめは、他校の人に話しかけるのも緊張しましたが、練習を重ねる内に仲良く話しながら練習できました。藝術大学の方も分からないところをとても丁寧に教えてくださいました。また、上級生や下級生との絆も深められたように思います。音楽は人を元氣にするだけではなく、自分自身も元気になる、これから私のにとって貴重な学びになりました。そして、人々を幸せにする音楽がこれからも伊達市に響き渡り、伊達市の文化の一つとして根付いていってほしいと思います。

優秀賞

靈山町のこれからのために

靈山中学校 二年 菅野 隼平

私の住む伊達市靈山町は、実は、歴史の記憶が至る所にあふれている土地です。例えば、路面電車。自動車が各家庭に普及する前には一九七一（昭和四六）年まで運行しており、靈山町の中心部である掛田地区にある掛田駅は路面電車交通の要衝として福島市と現在の伊達市を結んでいました。その他にも三五〇年受け継がれてきた靈山太鼓や大石地区で南北朝時代から続く濫觴の舞いなど、長きにわたって守り伝えられてきたものがたくさんあります。中でも、私が靈山町発展の起爆剤となってくれるのではないかと期待しているのが南北朝時代に南朝方の武将として活躍し、現在、靈山町を守ってくれている、「北畠顯家」です。このふるさとの英雄を我々靈山町の住民がPRしていくことで、靈山町ひいては伊達市のさらなる発展につながっていくであろうと思つて いるのです。

私は北畠顯家を主人公にしたアニメーション作品を作つてみることを提案します。なぜなら、北畠顯家はドラマに満ちた人生を送り、その人生は作品の題材とすることに適していると思うからです。さらに、彼の残した遺産は、彼がまつられている靈山神社やその周辺の大石地区に今も残つており、大石地区をはじめとして靈山町の各地にそのアニメを取り口とする観光客の方にめぐつてもううことで靈山町の持つさまざまな側面

を知つてもらうきっかけになるとも私は考えています。現在、伊達市には「ダテニクル」というアニメ作品があり、この作品を通して、まちのPRを行っています。そこでノウハウを活かせば、「ダテニクル」に続いてさらに全国に伊達市の名前を広く知らせることができると私は思います。現在は日本国内のあらゆるところでアニメなどのサブカルチャーを使つた地域おこしが行われており、多くの成果をあげています。しかも靈山町には高速道路のインターチェンジが位置していて観光客の方に来てもらいたい環境が整っています。また、インターチェンジを出てすぐのところには道の駅もあり来場者が一千万人を数えるほどの一大観光地となつて いるので、作品の発信拠点としてぴったりです。これらの理由から靈山町でご当地アニメを作ることは考える価値のあるものだと思います。

ここまで、アニメ作品の必要性について述べてきましたが中学生の私にもできることがあると思います。それは、大人になってこの目標を達成させるために今から準備をしておくことです。「どんな作品がヒットしやすいのか」などと調べておくことで、実現可能な形を探ることができるのです。

私はこの作文を通して考えたふるさとのこれからについてさらに考えを深め、別の課題が出た時も積極的に自分の考えを発信していけるようにしたいです。

優秀賞

教える側へ

月館学園中学校 二年 大河内 瑞希

私の住む下手渡地区では、毎年夏祭りが行われています。たくさん の屋台や打ち上げ花火などはありませんが、私はそのお祭りが大好き です。

お祭りは、午前中から行います。午前十時ぐらいから午後三時ぐら いまで、お神輿をみんなで引つ張り、下手渡を回ります。お神輿の中 では太鼓を叩き、まわりを盛り上げます。お昼は、祭りに関わった人 たちみんなで机を囲み、焼きそばや焼き鳥を食べます。夜は、十八時

から二十時ぐらいまで屋台の食べ物を食べたり、子供会や婦人会の踊 りを見たり、大道芸や太鼓を見たり、bingo大会などをしたりします。 一日中歩いたり、太鼓を叩いたりして大変ですが、とても楽しいです。 私は今年の祭りと去年の祭りで、変化したことがあります。それは、 教えてもらう側から教える側になつたということです。まず、お祭り の当日は、お神輿の中で二人が太鼓を叩きます。小太鼓一人に大太鼓一 人です。小太鼓と大太鼓では、それぞれ叩くりズムが違います。太鼓 を合わせるために、本番の二週間前から水曜日と金曜日に、夜七時半 から八時半まで練習します。例年、私の祖父が教えてくれていました が、今年は、

「何年もやっているんだから俺がいなくてもわかるだろ。」

ということで、教えてくれる大人がいないまま練習をしました。祖父 が言っていた通り、私も含めて全員が、教わらなくても叩けるようになつて いました。

そして、去年と違うところはもう一つありました。それは、小学校 高学年の妹の同級生が祭りに参加することです。祭りに参加するにあ たって、夜の太鼓練習にも参加してくれるようになりました。

教えてもらう側から、教える側になるということは、とても難しく、 とても楽しいことでした。妹は小学六年生で、妹の同級生は妹を含め 五人参加してくれました。そしてそのうちの一人の女の子が、「大太 鼓をやってみたい」と言ってくれました。大太鼓に興味を持つてもら えてうれしかったです。叩き方を一通り見せ、声をかけ、隣で叩くふ りをして教えました。

祭りの当日は、その子と一緒に太鼓を叩きました。小太鼓は大太鼓 よりも叩く回数が少ないですが、その分同じテンポで叩かないといけ ません。テンポが速くなつてしまつたときは、去年私が小太鼓を叩い ているときに、近くにいた父が声をかけて、テンポを戻してくれたよ うに、私も声をかけました。

祖父から教えてもらった太鼓を教えるのは想像よりも楽しいこと でした。また、教えると同時に、もっと新しいことを知り、学びたい と思いました。来年は、違う叩き方を祖父から教えてもらって叩ける ようになり、それを次の人に教えられるようになります。

優良賞

笑顔が絶えない町の伊達市

伊達中学校 一年 渡邊 裕乃

私が育った伊達市は、自然豊かで多くの歴史や文化があり、温かな人々が暮らす地域です。この伊達市に住み始めてから、素敵な伊達市の魅力にたくさん気づき、地域に貢献するようになりました。

小学校低学年の頃は、伊達町の大きなイベント、長岡天王祭に参加しました。毎日夕方には集会所に集まり、子供たちや地域の方々が太鼓や笛を練習しています。私も地域の方にリズムを教えてもらいながら、一生懸命太鼓の練習に励みました。

祭り当日はたくさんの人々でにぎわい、盛り上がりが絶えない状況です。雨が降ってもどんなに暑くとも、参加する人、山車を見に来る人、地域の人々の笑顔を見ていると、このお祭りを盛り上げている一員として、初めて地域貢献に対する喜びを感じました。

小学校高学年の頃は、部活に入っていることもあり、太鼓の練習には行けなかつたため、天王祭の参加は断念しました。しかし、もう一度地域の人々の笑顔が見たい。喜びを感じたい。という思いから、自分ができることとして、廃品回収やお祭りの寄付集めなどに参加しました。

「お手伝いかい。偉いね。ありがとう。」

と地域の人に会うたびに笑顔で言われます。私はその笑顔をたくさん見ることができて、地域の一員として再び喜びを感じ、自分も自然と笑顔になっていることに気づきました。そして、地域に貢献することはいいなと改めて感じました。

この春、私は中学校に入学しました。勉強や部活など色々なことが重なり忙しく、地域の活動に参加できていない状況です。しかし、地域の人々との関わりは今も変わらず絶えることはありません。近所の方からおいしい果物や野菜をたくさんいただいたり、笑顔でいさつをしてくれる人がたくさんいます。そして、今年は友達と天王祭に行き、屋台の食べ物を食べたり、各地域の山車が集まって盛り上がっていいる様子を見て楽しみました。私がこうやって楽しめていることは、たくさんの地域の人々が協力して、盛り上げようと頑張ってくれているからです。私はそんな伊達市が、素晴らしいと誇りに思いました。

今までたくさんの地域の人々と関わってきて、それと同時に喜びを感じることができました。私が今、この地域との繋がりで大切にしていることは、みんなを笑顔にさせることです。今まで取り組んできた地域活動を通して、たくさん笑顔を何度も見ました。そして、私自身も笑顔になりました。喜びを何度も感じました。

「笑顔が絶えない町」の明るい伊達市にしたい。私は今日も町の人々の笑顔を見るために、日々地域との交流を深めています。

優良賞

学びと、発信

梁川中学校 三年 橋 沙紀

「いか人参、自分で作れる人。」

皆さんは伝統的な文化と聞いて何を思い浮かべますか。

私の地域では毎年四月に獅子踊が行われていました。これは江戸時代の延宝年間に始まつたと伝えられています。踊りと一緒に笛や太鼓も演奏します。私がまだ小さい頃に獅子踊を見た時は、竜のような被り物が怖くて泣いていましたが、少し大きくなると踊りがかっこいいなと思えるようになりました。今は、数年前にコロナの影響で中止されから行われていません。後継者がいないというのも理由の一つだそうです。かつこいい獅子踊をまた見たいと思いますが、どうすればいいのでしょうか。将来は私も踊りを覚えて参加して、また地域の人たちを盛り上げられるようになりたいです。

今年、私は受験生です。目指している高校、大学は伊達市内ではありません。日常を送る場所が伊達市から少し離れてしまいますが、必ず帰ってきて伊達市に貢献できるようにしたいです。

私の将来の夢は、幼稚園教諭です。小さな子供と接することが好きでそれも楽しみですが、今は地域の伝統的な文化を伝えることも頑張りたいと思っています。自分たちの住んでいる地域について興味をもつて欲しい、みんなが文化を大切にするような地域にしたい、この希望をもって将来を考えていきたいです。

私が小学生だった頃は地域のお年よりの方と一緒にちまきを作つたり、和太鼓やカンフーを教えてもらつたり手品を見せてもらつたりと地域での交流がたくさん行わっていました。みんなで楽しくちまき作りをしたことは今でも覚えています。さらに、小学校の運動会では地域の踊りを毎年踊っています。一年生から六年生までみんなで練習して、本番当日には肩にはちまきのようなものをかけて輪になつて踊ります。初めて踊る一年生に、六年生が一生懸命教えてあげる、こう

して受け継いできました。これらは今でも続いています。私は地域の人と関わることで、新たな発見や楽しみを見つけることができました。

最近、中学校の授業で郷土料理のいか人参についての話題が上がりました。先生が、

優良賞

天まで届け俺らの太鼓

松陽中学校 一年 渡邊 友惺

私は、流町若連会というお祭りを開催したり、太鼓を叩いて盛り上げる団体に父や妹たちと参加しています。

私は、小学三年生の夏から流町若連会で太鼓練習に参加するようになりました。初めはなかなかうまく叩くことができませんでした。

しかし、若連会の仲間が、

「ひざを曲げて手首のスナップを利かせて太鼓の中心部分を叩けばうまく叩けるよ。」と、優しく教えてくれました。

それから私は、仲間が教えてくれたことを意識して練習を重ねました。自信がついた私は流町若連会が出演するお祭りで積極的に太鼓を叩くようになりました。

去年の三月には、保原町の厳島神社前で開催されたつっこ引き祭りで

太鼓を叩きました。つっこ引き祭りとは、ふんどしで裸の男たちが、もち米入りの大きな俵を引き合い、農作や無災害を願うお祭りです。ふんどしで裸の男たちや多くの観客の前で太鼓を叩き、お祭りを盛り上げることができました。

また、去年の四月には、上保原の淡島神社宮祭りで太鼓を叩きました。このお祭りは、年に一度上保原全地区を山車を引いて練り歩く一日が

かりのお祭りです。コロナの影響で六年ぶりの開催となり、私は初めての参加でした。一日中太鼓を叩きながら歩きとても疲れましたが、各地区に住む人たちに太鼓の音色を届けることができました。

さらに、去年の八月には、上保原駅で流町若連会が開催した純情夏祭りで盆踊りの太鼓を叩きました。上保原駅が人でいっぱいになるほど近所の人たちが参加してくれ、みんなで太鼓の音色に合わせて盆踊りをしました。

以上のように、去年は、保原町の様々なお祭りに参加し、多くの人たちと関わり、多くの文化、伝統にふれることができ、地元保原町の良さを知ることができました。

今年は、五月に、福島駅前で開催された、福島山車祭りでも太鼓を叩きました。私にとっては伊達市外で太鼓を叩くのは初めてで、なおかつ大きなイベントで叩くのは初めての経験でした。少し緊張したけれどたくさんの人の方で披露することが出来てとても気持ち良かったです。また、観客の皆さんから大きな歓声をいただき、若連会の仲間には、「今まで一番上手だったよ。」

と、ほめてくれて、とても嬉しかったです。

流町若連会には、五十人以上の仲間がいます。そのうち、後輩は二十人くらいいます。これからも、みんなでお祭りに参加し、後輩が成長するように教えていきたいです。大人になつても、生まれた子供に太鼓を教えて文化や伝統をつないでいくことが大切だと思いました。文化や伝統をつないでいくことは、地域の活性化につながります。今年も夏祭りや秋祭り、様々なイベントで太鼓を叩くので仲間たちと地域を盛り上げていきたいです。

優良賞

いつまでも美しく、笑顔溢れる町へ

桃陵中学校 三年 佐久間 心凜

私は、中学校で生徒会長をしています。

その活動の中に、地域に貢献することを目標に行つているごみ拾いボランティアがあります。全校生から希望者を募り、生徒会役員と共に、保原町のポイ捨てのごみ拾いを行い、プラスチックや燃えるごみに分別する活動です。環境にも配慮し、地域のみなさんが気持ちよく過ごせるような町づくりを目指して活動しています。

この活動は、生徒会本部を中心以前から行われており、桃陵中学校生徒会の歴史の一つとなっています。私も生徒会役員の一人として、この活動に何度も参加してきました。はじめは、面倒だという気持ちが強く、休日に朝早くから活動することに不満を抱いていましたが、何度も参加することで、活動が終わつた後の達成感や、継続しようという思いが強くなつていきました。それは、毎回活動をするたびに、自分達できれいにした保原町の美しい自然と雰囲気を肌で感じるからです。

今年の夏休み、私達は夏祭りの後のごみを拾うため、いつものように生徒会役員と希望者でごみ拾いを行いました。当日は雨でしたが、雨の中でも視野を広くして保原町をきれいにしようと意気込み、皆で協力しながら効率よく活動することができました。草むらや道路の端など、小さなも

のも見逃さず丁寧に拾いました。祭りのごみ以外にも、乾電池やコンビニの食べ残しのごみなどもありました。普段は桃陵中生だけで活動しますが、この日は地域の商工会の方と活動しました。普段と違つた雰囲気に少し緊張感がありました。商工会の方々が黙々と祭りの片づけやごみ拾いを行つていたので、私達もより一層力が入りました。祭りの後にもかかわらず、一生懸命町をきれいにする商工会の方を見て、「この方々がいるから楽しい祭りや行事が行わされているんだ。この保原町を笑顔にできる素晴らしい方々なんだ。」と感じ、責任をもつて町のために取り組む姿にかつこよさを感じました。

私は、歴史のある生徒会の活動を地域の人々と共にしたことで、保原町がきれいで活気のある町の理由に気づかされました。それは、地域を笑顔にしようと活動する町の人々の存在があるからです。そして、その人々の思いが町の歴史として受け継がれているからです。私達生徒会役員がつないできたように、町の人々も、いつまでも保原町が元気にそして愛される町であるよう活動してくださっています。私達は商工会の方々の行動でその思いを感じました。私は、このごみ拾いボランティアで学んだ心を大切に、これからもごみ拾いを続けます。町が町の人の心がいつまでも美しくあつてほしいと願っています。

その先に見えるもの

伊達中学校 三年 芳賀 彩風

キラキラと輝く豪華なシャンデリア。一千人を超える人々。私達は今、夢にまで見た「全国」という舞台に立っている。

中学二年生の秋、伊達中学校吹奏楽部で毎年出ているアンサンブルコンテストの練習が始まった。この大会は、大人数で出場する夏のコンクールとは違い、三人から八人程度の少人数で演奏する「アンサンブル」を競う大会だ。私は一年生の時、四人のチームで大会に臨んだ。目標は全国大会だったが、あと一歩のところで届かなかつた。悔しさでいっぱいだったが、来年こそは必ず！そう四人で約束した。そして、二年生になり、この大会に出られる、最後の年。去年よりも重厚感ある音にするために、私たち四人に加えて、一年生三人を加えた計七人のチームを作った。目標はもちろん全国大会だ。それから私たちは、一分一秒も無駄にしない思いで練習に取り組んだ。ダメな部分はリーダーを中心に言い合い、チーム全体で高め合ってきた。また、学校の練習量だけでは足りず、伊達市内の公共施設をお借りし、夜練をしたりして、自分たちができる最高の演奏を目指して、日々練習を重ねた。そしてついに、運命の分かれ道である東北大会まで行くことができた。本番では緊張したが、今までの成果を発揮できたと思う。結果はなんと、ゴールド金賞。そして私たちが昔から待ち望んでき

た「全国大会」への切符を手にすることができた。うれしさや安心などたくさん思いが込み上げてきて、去年とは違う涙が溢れんばかりに流れてきた。またこのメンバーで演奏できるチャンスがある。そのチャンスを無駄にしない、最高の演奏をしようと決めた。また、今まで全国大会に行くことばかり考えてしまつていてが、ここまで来られたのは、たくさんの人々に支えられてきたからだと改めて気づかされた。その思いや感謝を全て音楽に乗せて伝えようと考えた。

そしてついに、全国大会当日。ホールは、今までの大会で一番大きかった。座席は一千四百席以上ある。怖くて、不安で逃げ出したくなつたけど、チームみんなの顔を見ると、自然と気持ちが楽になつた気がした。演奏中は、頭が真っ白になりそだつたが、思いを音楽に乗せて届けよう。その思いは強く残っていた。全国大会の結果は銀賞で終わつてしまつたけれど、私は大勢の人、メンバーのおかげで人生で一生できないような体験をさせてもらえた。この経験は一生忘れないだろう。そして、これから的人生で、何かを挑戦する時に、必ず誰かは応援や支えてくれている人がいるはずだから、感謝の気持ちは絶対に忘れないようにしたい。

私の好きな町、伊達市

梁川中学校 一年 幕田 璃央那

私は、生まれてから十三年間ずっと、この伊達市に住んでいます。

私はこの町が大好きです。

その理由は、私の好きな果物がたくさん食べられるからです。桃、梨、ぶどう、柿、りんごなど一年を通して、おいしい果物を楽しむことができます。

それから、地域の人達がとても優しく温かいことです。朝、学校へ行く時に、近所のおばあさんに会うと、「おはよう。いつでらっしやい。」

といつも声をかけてくれます。私は朝からとてもいい気分になつてうれしい気持ちで学校に行くことが出来ます。私も、おばあさんのような大人になります。

こんな大好きな町を、数年前、災害がおそいました。令和元年の東日本台風です。

私は当時、小学一年生でした。

近所の人から、近くの川がもう危ないと、連絡があつて、私は家族と一緒に避難所に避難しました。

次の日の朝、私の家がすごい被害にあつたと聞きました。床上百九十七メートルも水があがりました。私の家は建てたばかりだったので、家

族みんながとても大きなショックを受けました。家の物のほとんどが泥水でぬれてしまつたので、私達家族は、約一ヶ月半の間、避難所で生活をしました。

避難所では、たくさんの方が私達を助けてくれました。同じ町の方を始め、全国各地からボランティアで来てくれた人が、温かい食事を作ってくれたり、一緒に遊んでくれたり、勉強を見ててくれたりしてくれました。

それから、聖光学院野球部のお兄さん達や梁川高校の生徒さん達が、「何か手伝えることはありませんか? 何でも遠りよなく言って下さい。」と家にたずねて来てくれました。

大量の物の片付けで困っていた所で、とてもうれしかつたし、力になつたと、父や母から話を聞きました。

大きな水害にあって、私達は大切にしていたたくさんの物を失くしてしまつたけれど、多くの人達からたくさんの優しさをもらいました。おかげで、避難所でもさびしい思いをすること無く、安心して過ごすことが出来ました。

東日本台風は大きな災害でしたが、私達が住んでいる町では、ぎせいになつた人は一人もいませんでした。それは、住民同士が普段から声をかけ合つたり、地域の行事に参加することで、人ととの結びつきがあつたからだと思います。

もし、また危ない時が来たとしても、声をかけ合つて、安全なうちに避難するように心がけたいと思います。これからも、大好きなこの町でみんなと暮らして行きたいです。

靈山太鼓を広めるために

靈山中学校 一年 高田 愛依

「靈山町ってどんな文化があるの？」

こう聞かれたらなんて答えるだろうか。靈山町には、歴史や文化がたくさんある。しかし、私たちはその歴史や文化を学べているのだろうか。ふとこんなことを思った時、私は今自分が知っている靈山町が全てではないと思った。

「靈山町の文化ってなんかある？」

私は、友達に聞いてみた。

「靈山太鼓とか有名じやない？」

私は、小学校六年生の学習発表会で靈山太鼓の演奏をしたことを思い出した。その時初めて靈山太鼓を演奏し、思っていたよりも難しかった記憶がある。私は、あまり靈山太鼓を知らなかつたので、詳しく知りたいなと思い調べてみた。靈山太鼓は江戸時代の寛文(千六百六十年頃)から始まつたと言われていて、約三百五十年以上の歴史を持つ伝統芸能として受け継がれてきたものである。靈山太鼓の特徴は、桐製の太く短いバチを高く振り上げ、華々しく大太鼓を連打する「曲打ち」と呼ばれる演技方法だ。そんな魅力のある靈山太鼓がもっといろんな人に広まれば、伊達市の文化としてさらに有名になり、新しい魅力のある伊達市をつくることがで

きるのではないかと思った。

そこで、私は、靈山太鼓が有名になることができればいいなと思い、靈山太鼓を広める方法を二つ考えた。

一つ目は、講習会やワークショップを行うという方法だ。講習会は二千二十年ごろまで実施されていたが、現在は講習会などは行われていない。私は、靈山太鼓を知る機会が少し減っていると感じた。そこで、年に一ヶ月講習会やワークショップを行う。そうすると、実際にバチを握って演奏できるので、より靈山太鼓の魅力を知ることができると思う。

二つ目は、地域外への発信をするという方法だ。例えば、インターネットで靈山太鼓の演奏や魅力をもつと発信したりすれば靈山太鼓を知る人が増えると思う。それに、演奏する方たちが増え、次世代にも受け継ぐことができると思う。

だが、この方法を私たちが行うのは難しい。だから、私たちでもできる簡単な方法をひとつ考えた。それは、太鼓をやつたことがない周りの人たちに靈山太鼓を伝える方法だ。太鼓について知らない、やつたことがない友達や家族など身近な人に魅力を伝えるだけで、靈山太鼓のよさに気づいてもらえるかもしれない。

靈山町の文化や歴史は靈山太鼓だけではない。他にもたくさんの文化がある。もし、靈山町の文化を自分が知っているなら、他の人にどんどん伝えてほしい。

「靈山町ってどんな文化があるの？」

こう聞かれた時、すぐ答えられるよう、私はもっと「靈山町」について学んでいきたい。

地域の伝統を守るために

靈山中学校 三年 菅野 愛

大石には色々な文化や歴史的な建物が残されています。そこで私は大石にある文化を紹介したいと思います。この作文をきっかけに大石のことを知つてもらいたいと思います。

大石には濫觴武楽、獅子舞、靈山太鼓などがあります。濫觴武楽の歴史は今からおよそ六百六十年前に遡ります。北畠顯家が義良親王を自分の主人として奉り靈山城に入った時に、山の上にある山王大権現に剣の舞を奉納しました。そして、軍隊の勝利と家来たちの鬪志の高まりを祈つたのが始まりと言われています。

靈山太鼓が毎年奉納されます。

私が住む地域にはこのように素晴らしい文化が残されています。これらの文化はこれからも受け継いでいかなければなりません。なぜなら、たくさんの人を魅了させ引きつける力があるからです。また、地域の人人が関わる場でもあるからです。ですが少子高齢化が進み、後継者が減少しています。そこで私はこの作文をきっかけに大石にある伝統芸能や文化を知つてもらい後継者が増えてほしいと思っています。お祭りに来て伝統芸能の楽しさを一人でも多くの人に知つてもらいたいです。ぜひ、来年四月二十九日にある春季例大祭に足を運んでみてください。

三郎兵衛が、お伊勢参りの帰りに、子供たちへのお土産に三匹の獅子頭を買い、祇園の神主から獅子舞を習つて帰りました。その後、この舞を教え、郷社の山王大権現の神前に奉納しました。これが下大石の獅子舞の始ま

りと言われています。現在では、地域の少子化により奉納が困難になつてしましました。

その他にも靈山太鼓や、建物では靈山神社などがあります。靈山太鼓は寛文年間が始まりと言われ、現在の福島市・伊達市で独自の発展を遂げ長く受け継がれてきた太鼓で、町内には多くの保存会があり、大石では後継者の減少により数年前から南、北、下大石の三つの保存会が連合して靈山太鼓祭りに参加しています。靈山神社はもともと別格官幣社でした。北畠一族が祀られています。別格官幣社とは、普通の神社とは違い、明治政府から特別に扱われたところにあるそうです。先ほど紹介した濫觴武楽や

講評

審査委員長 木村 圭吾（元栗野小学校長）

伊達市民憲章作文コンクール九年目のテーマは、「きずきましよう 学ぶ心とゆたかな文化を」という課題でした。それには補足として〈教育や文化を尊重し、読書に親しみ、生涯を通して学べる教育環境を充実させ、広い視野に立って行動し、地域を活性化できる創造的な人材の育成をめざします。〉という説明が添えられています。それらを小・中学生がどのように受け止め、どのように内容を具体化し、文章にまとめているかが審査のポイントでした。

今年度は、市内の小・中学校の協力のもと、四百七十八点の作文が寄せられました。その中から学校推薦のあった三十四点の作品が最終審査に残りました。三人の審査委員により選考が行われ、最優秀賞、優秀賞、優良賞、佳作の各賞が、次のように決まりました。

*

最優秀賞に輝いたのは、伊達東小学校六年大橋亜蘭さんの「地域のごみ拾い」と桃陵中学校二年田中千春さんの「音楽を通して感じたこと」の二点の作品でした。大橋さん作品は、地域のごみ拾いを通して家族や地域の方から学んだことが書かれています。自分が行動することで、地域の方の温かい支援に気づき、きれいな地域が保たれれば、文化につながっていく

という考えは、私たちも学ぶことが多い内容でした。中学生の田中さんの作品は、吹奏楽部員として演奏することを通して、自分自身が多くのこと学んだことをしつかりした文章構成で書かれていました。一緒に参加した他校の級友や地域の方、東京藝術大学の学生など、様々な結びつきから伊達市の文化として発信したいという思いが素直に感じられました。二つの作品とも、自分の体験をよく振り返り、テーマに沿って構成し、読み手に分かるように書かれていました。自分なりの学びが表現されていて説得力がありました。

優秀賞に選ばれたのは四人の作品です。小学生部門は、上保原小学校五年池田幸永さんの「みんなの支え」と月館学園小学校六年大河内咲希さんの「私の居場所」の二作品です。中学生部門は、靈山中学校二年菅野隼平さんの「靈山町のこれからのために」と月館学園中学校二年の大河内瑞希さんの「教える側へ」の二作品です。池田さんは、自分がんばっているミニバスケットボールと東日本大震災から立ち上がり進んでいる伊達市の人々の支えをもとに、前向きに取り組んでいきたいとまとめました。大河内さんは、子ども食堂を運営している方の「もつといろいろな人に利用してほしい。」という意見をもとに、学校で紹介をしたい。とまとめました。自分が働くことで、食堂の運営まで考えるという学びにまとめることができました。菅野さんは、靈山の歴史を後世に伝えることで、靈山町を含む伊達市が発展できると述べています。大河内さんは、靈山太鼓での経験をもとに「教えることは楽しい」と述べています。伝統を受け継いでい

く」との心地よさがあるのでないかと感じました。

優良賞に選ばれたのは八人の作品です。小学生部門は、伊達小学校六年 小山真桜さんの「祖父母と私の学び」、保原小学校六年長沼斗夢さんの「学ぶことは人生を楽しく生きること」、掛田小学校六年引地駿輔さんの「学ぶ心と引きつがれる伝統」、小国小学校五年八島優空さんの「お祭りを通して考えたこと」の四作品です。小山さんは、祖母との暮らしで、たくさんのことを学んできることに気づきました。自分も生涯学習をしていくたいと述べています。長沼さんは、おじいちゃんが木工細工を学び作品を作っていることを通して、「学ぶことは楽しい」ということを学んだことをまとめました。引地さんは、曾祖母や地域の高齢の方が様々な学びをしていることを通して、学ぶことは地域の人をはじめ多くの人の支え合いの中でのつながりについて理解しました。八島さんは、靈山太鼓の保存会で活動しています。祭りに集まる祭りの楽しさを自分も経験して、祭りで互いに交流したいと抱負を述べています。中学生部門は、伊達中学校一年渡邊裕乃さんの「笑顔が絶えない町の伊達市」、梁川中学校三年橘沙紀さんの「学びと、発信」、松陽中学校一年渡邊友惺さんの「天まで届け俺らの太鼓」、桃陵中学校三年佐久間心凜さんの「いつまでも美しく、笑顔溢れる町へ」の四つの作品です。渡邊さん自身が祭りに参加してきたことを通して、多くの人が笑顔になって祭りに集まることの楽しさを語りました。橘さんは獅子踊りや郷土料理のイカ人參などに伝統の大切さを見出し、これから私たちが文化の発信を担いたいと述べています。

す。渡邊さんは、若連に祭りに参加することで地域のつながりを感じてきました。伝統をつないでいくことが地域の活性化につながるとまとめました。佐久間さんは、生徒会長としてごみ拾いボランティアに取り組み、そこで出会った地域の方の努力に気が付きました。ボランティアを続けていきたいとまとめています。

佳作には八つの作品が選ばれました。小学生部門は、伊達小学校五年石高結梨さんの「人々を支えてきたお蚕様」、梁川小学校六年鈴木美千翔さんの「伊達市の笑顔を引き継ぐこと」、掛田小学校五年丸山颯志朗さんの「僕が文化を繋ぐには」、小国小学校六年の星野大河さんの「伊達市をよりよくするためできること」という四作品です。中学生部門は、伊達中学校三年芳賀彩風さんの「その先に見えるもの」、梁川中学校一年幕田璃央那さんの「私の好きな町、伊達市」、靈山中学校一年高田愛依さんの「靈山太鼓を広めるために」、靈山中学校三年菅野愛さんの「地域の伝統を守るために」の四作品です。いずれも、地域の人々とのつながりから学んだことを自分の言葉で書いていました。

最終審査に残った作品は、伊達市民憲章のテーマを踏まえて、学びや文化について、経験や体験と関連付けながら、まとめしていました。書くことを通して、考えが深まっている作品ばかりでした。審査を終えて、音楽やお祭りや太鼓を題材にした作品が数多くありました。それらが、伊達市の中でしつかり文化として根付いていて親しまれ、今の子どもたちが次の世代へと引き継ぎうとしていることを再認識しました。



伊達市民憲章

～心をひとつに～

わたしたちは、緑豊かなふるさとの歴史と伝統に誇りをもち、
協働の精神でさまざまな困難をのりこえ、
健康で安心して暮らせる活力ある「伊達なまちづくり」をめざし、
この憲章を定めます。

一 まもりましょう

ふるさとの自然と歴史を

一つなぎましょう

世代の絆とたしかな信頼を

そだてましょう

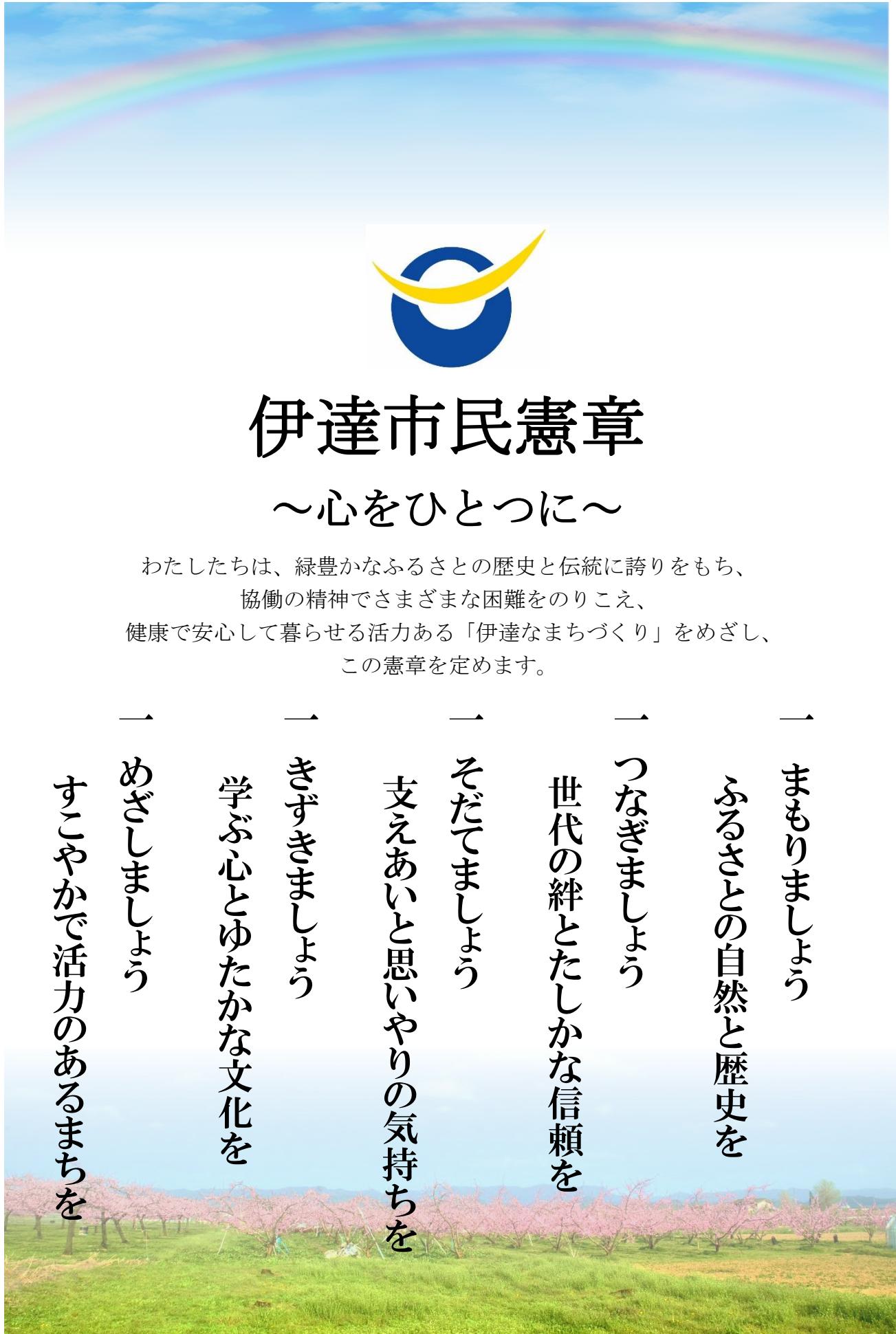
支えあいと思いやりの気持ちを

きずきましょう

学ぶ心とゆたかな文化を

めざしましょう

すこやかで活力のあるまちを



市民憲章の解説

一 まもりましよう ふるさとの自然と歴史を

豊かな自然環境と、先人が築いてきた歴史、文化、伝統を大切に守り、それらを生かしたまちづくりに努め、心豊かに生活できるふるさとの実現をめざします。

【憲章名】 憲章名を「伊達市民憲章」とし、副題の「心をひとつに」という言葉は、伊達市が合併したときの「伊達織りなす未来 ひとつの心」という表現に象徴されるように、旧町それぞれの個性を生かしつつ、「伊達市」として一体になろうという理念を継承したものです。

【前文】 本憲章は、私たちが誇りとする自然、歴史、文化、伝統を尊重・継承し、市民みんなの力で大震災、原発事故、人口減少に伴う社会問題などの困難を克服するとともに、地域も人も輝き、豊かで明るい未来をめざす伊達市の実現のために定めるものです。「伊達なまちづくり」には、誰もが健康で自分らしく生涯を過ごすことができるまちでありたい、という強い願いが込められています。

一 つなぎましよう 世代の絆とたしかな信頼を
世代の垣根を越えて人々が連携し、望ましい信頼関係を築き、創意ある取り組みで地域の活力を生み出し、規律を尊重した安全・安心な地域づくりをめざします。

一 そだてましよう 支えあいと思いやりの気持ちを

自らを高め、地域ぐるみでお互いを支え合い、安心な子育てを実現し、住み慣れたふるさとで自分らしく明るく暮らせる社会づくりをめざします。

一 きずきましよう 学ぶ心とゆたかな文化を

教育や文化を尊重し、読書に親しみ、生涯を通して学べる教育環境を充実させ、広い視野に立って行動し、地域を活性化できる創造的な人材の育成をめざします。

一 めざしましよう すこやかで活力のあるまちを

健幸都市宣言をふまえ、子どもからお年寄りまで運動に親しみ、地域の人も輝く活気あるまちづくりを推進し、地域の特色を生かした産業の振興・発展をめざします。

【本文】 子どもからお年寄りまで声に出して唱え、日々の暮らしの中で明確な目標を持ち、市民が協力、協調しながら実践しやすいよう、簡潔で親しみやすい表現にしています。「～ましよう」という五つの呼びかけには、市民一人ひとりが主人公となり、希望あふれる伊達市の未来を積極的に創り上げようという思いが託されています。



編集発行：福島県伊達市総務部総務課
令和8年1月